

扁平な玉石を敷きつめている。水際には全体にわたって一列に玉石を立てて据えつけ、岸辺はゆるやかな勾配で玉石を敷く。岸の外側には挙大の礫を敷き地表を保護している。池底は同様に扁平な玉石を敷きつめ、ほぼ水平であるが、池尻の部分は排水を考慮して中央部の底石を一段下げている。導水口と溢水口の高さから推定すると、水面の幅は広い所で約6m、狭い所で約2mで、水深は広い所で最も深く約25cmで、全体に浅い池と考えられる。庭石は水蝕のある褶曲をもつ石英質片磨岩を水辺に、花崗岩に一部安山岩を混えて岸に使用し、しかも汀線が突出したり彎曲する変点に集中して配置している。また、池の中程やや北よりの西岸近くと池尻の東岸近くの2個所に、段違いになった木枠を拵えた旋設S X1503、S X1463がある。底板を敷き、その上に側板を2段に組み合せた箱状のもので、その中に土を入れて水生植物の栽培に使用されたものであろう。なお、池の堆積土中には、クロマツの球果、ウメ、モモの核、センダンの核、種子などとともに水生・水辺植物の遺体が検出されている。

園池南辺の池尻には壁状に一列の立石があり、その後に溢流部がある。池から溢流した水は南の階段状の石組の溝S D1465に流れる。さらにその水は幅2.1mの両側を玉石で護岸した排水溝S D1466に流れこむ。溢流部の石組の溝の下には、池尻と排水溝を結ぶ長さ25mの木樋S X1464（外法寸法20×20cm）が貫通している。木樋の構造は取入口と同様、池尻側の蓋先端部に径12cmの円穴を穿っている。木樋は池の水を抜く際に用いたものであろう。

前述した如く、園池の形状、水深の浅さなどから判断すると観賞と同時に曲水宴などの行事、雅宴に利用できる実用面をあわせもつものと考えられる。

園池に併存する建物はA・Bの2期に区分できる。

A期 園地、建物7棟、塀6条、井戸2基、溝2条がこの時期に属する。A期は平城京造営当初から天平勝宝年間に比定できる。すなわち、上限は園池導水路S D1525から出土した和銅年紀の木簡により、下限は柱穴から出土した平城宮第Ⅲ期の軒瓦や土師器の年代を根拠とする。建物は坪の中心線を基準として計画的に配置されている。すなわち、坪の中心部に園池SG 1504を配し、これを囲む形で軸線から70尺の等間隔で、東西南北に塀SA 1455・SA 1536・SA 1473・SA 1500を設けている。2間×6間の南北棟建物SB 1510、東西棟建物SB 1519はともに北側柱を坪の東西中軸線に揃え、南北中軸線から西へ70尺・140尺に位置する。東西棟建物SB 1542は西側柱が発掘区外となり確認できないが、桁行5間と推定すると南北中軸線より140尺に位置する。また2間×3間南廂の東西棟建物SB 1550の東側柱は南北中軸線上に位置する。2間×3間の南北棟建物SB 1505と2間×5間の南北棟建物SB 1470は西側柱と東側柱を揃えて配置され、この延長線上から塀SA 1473がはじまる。南北中軸線より西30尺にあたる。北側にある東西溝S D1545（幅約80cm）は三条条間路に面する築地内側の溝に比定できる。建物配置は10尺と7尺の基準方眼で計画されておりA期内でも2期の増改築が考えられる。こうした配置計画は建物、塀にかぎらず溝S D1451・1453・1456、井戸SE 1511・1547にも適用される。また塀で囲まれた園池の西側の3棟の南北棟SB 1505・1470・1510は、彼方の東山を借景に園池

を鑑賞するためのものであろう。特に S B 1505は池岸の石敷部に東南隅柱を立て、池台や池亭のような性格をもつものかも知れない。

B期 建物5棟、塀1条、溝2条がこの時期に属する。B期の下限は園池の埋土から出土した遺物により奈良時代末と考えられる。この時期も園池を中心としたA期の計画的な配置を踏襲している。北塀 S A1500の柱通りに北妻柱を揃えて4間×8間の礎石南北棟建物S B 1540を配置する。東側柱は南北中軸線から西84尺にあたる。また、2間×3間の南北棟建物S B 1471、S B 1472は西側柱を揃えて配し、南北中軸線から西56尺の位置にある。また、東91尺の位置に西柱を揃えた2間×3間の南廂をもつ東西棟建物S B 1476があり、目隠し塀S A1483を伴う。この時期の建物配置をみると、今回検出した建物のうち最大規模のS B 1540を主殿として、園池が広く見渡せるようその前面を広い空間地としている。

遺物 今回出土した遺物は発掘区全体から出土しているが、量的には多くない。土器類では二彩釉、緑釉、灰釉などの施釉陶器や土師器、須恵器が出土した。導水路からは木簡と共に奈良時代前半の土師器が出土したほか、園池の埋土からは園池の下限を示す奈良時代末の土師器杯や須恵器大型甕が出土した。

瓦類では約100点の軒瓦が出土した。軒瓦は平城宮内使用瓦と同範のもが多い。このことは最近の京内調査で京内特有の瓦が認められた傾向とは異り、宮との深い関係を示すといえよう。また、年代的にみると平城宮の瓦編年によるⅡ期（養老5年～天平17年）、Ⅲ期（天平17年～天平勝宝年間）に属するものが多く、それ以前の藤原宮式軒瓦も若干ではあるが出土している。

木製品は排水路から人形・削り掛け、導水路の埋土から黒漆塗の容器蓋、人形、糸巻きの横木、鋤の把手、匙、曲物の蓋・底板が出土したが、あまり多くない。

木簡は64点出土した。出土遺構は菰川より園池S G 1504への導水路S D 1525で、予備調査ではその中間地点の青灰色粘質土から（14点）、本調査では末端の屈曲部、木樋SX 1523の水取り入れ口付近から西へ南壁に沿って発見された（50点）。木簡が出土したのは旧河川の砂層上に貯水のとき堆積したと思われる暗灰色砂混り粘質土からで、多量の加工木片とともにあった。和銅5、7年の年紀のあるものが3点あり、地名表記等（長郡、額田部里など）からみても、木簡はほぼこの時期のものと考えられるが、園池造作に関連するか、上流より流れ込んだものか明らかでない。木簡の内訳は文書様木簡8、付札類9、習書4、削屑6、その他である。貢進物



第6図 園池跡出土木簡

の付札には、若狭（調査 和銅5年）、阿波のものがあるほか、里名・人名のみのものが多い。この庭園遺構を考える資料となる重要な木簡として、つぎのものがある（第6図）。

（表）鴨郡□（裏）北宮俵□

某国鴨郡より北宮への用物（米か）貢進の付札であるが、北宮は和銅5年の長屋王願経（大般若経）の跋語や、神亀3年山背国愛宕郡出雲郷雲下里計帳にみえる。長屋王願経では文武天皇追善のための写経を北宮（文武天皇旧居といわれる）で行ったごとくであるから、跋語の北宮は藤原京所在であろう。しかし上掲計帳により北宮が平城京でも存在したことは明らかであり、この木簡は文武崩御ののち、その妹で長屋王室の吉備内親王にうけつがれ、平城京内に造営された北宮を指すものと考えてよいだろう。そのように考えると当庭園遺跡がその規模からみて北宮であった可能性は充分考えられよう。

上記の写経に関連するかと思われる木簡としてつぎのようなものがある。

（表）五百冊二（裏）二百七十

一校授

木屑様の木片にかかれてはいるが、この大般若経の巻数を示すと思われる数字は写経風な文字であり、大般若経書写とのなんらかの関連を偲ばせる。

つぎの木簡はこの地域の居住者の性格を推測する手懸りとなる。

（表）御杯物直米二升充奉（裏）受古女 九月三日 棟垣忌寸

この木簡にみえる「御杯物」が天皇の御杯に盛った食物の意であることは、『播磨國風土記』賀古郡条から知られ、この園池遺構と天皇やその近親者との関係を示していよう。

その他、官職名のみえる「中務省少録□□□□」や、習書ではあるが「棟部智麻呂 高椅善麻呂」の人名のみえるものがある。

まとめ 左京三条二坊六坪の中心に園池を造成し、その西方には園池彼方の東山を借景に見る数棟の南北棟建物を配置し、四周を屏で囲んだこの一郭は、庭園遺構の機能をよくそなえている。こうした奈良時代の庭園遺構の発見は、日本庭園史研究上画期的なことであり、古代庭園の再評価を含めて、園池の意匠や作庭技法の基礎的資料を提供したといえよう。

つぎに左京三坊二条六坪の遺構の性格にふれてみたい。出土遺物からみると、土器などの日常生活に必要な生活用具が少ないと、軒瓦がいずれも平城宮使用のものと同型式であり、邸宅への瓦葺き奨励（神亀元年）以前に瓦が使用されている点、また木簡に北宮に関連したものや「御杯」などと記したものが出土していることから、宮廷的な施設の要素がうかがえる。また、園池の形状や構造が公的儀式である曲水宴に適していることも、宮廷ないしはこれに準じる性格をより強く示しているといえよう。

以上のような遺構や遺物のあり方から判断して、この遺跡は2町ないし4町の規模をもち、平城宮と密接な関係を持つ公的施設、あるいは天皇や皇族の宮に関係した園池である可能性がきわめて高い。

薬師寺食堂北方地域の調査 調査地は、薬師寺の北口参道をへだてた東側にあたり、すでに発掘されている食堂基壇北辺から約30m北方の地点にあたる。

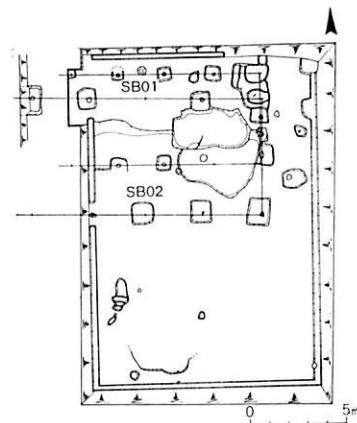
発見遺構は、赤褐色粘質土面で大小6個の土壙、暗灰色粘質土面で奈良時代と考える東西棟掘立柱建物2棟および土壙1などを発見した。赤褐色土面で検出した土壙は、全て不整形で発掘区全体に散在している。埋土、遺物から2群に分けられる。1群は、発掘区北寄りに並ぶ2個の土壙で、平安・鎌倉時代の巴文軒丸瓦、瓦器を包含した鎌倉時代の土壙であり、もう1群は南部にある3個の土壙で、大量の瓦、平安時代の綠釉・灰釉陶器を出土し、平安時代に瓦類を廃棄した土壙と考えられる。もう1個の土壙は北端東寄りにある。

暗灰色粘質土面の掘立柱建物2棟は、発掘区北部に重複して検出した。2棟とも2間×4間以上の東西棟建物と考えられ、北寄りのSB01は柱間寸法8.5尺、南寄りのSB02は10尺、柱穴の切合い関係からSB01がSB02より古い。ちなみに、検出した遺構面を付近の調査で確認した遺構面の標高と比較すると、今回の発掘区の遺構面が標高59.9~60.0m、西北方にあたる1965年9月の高天商店の調査、西南方の1974年10月西僧房食堂調査の食堂西北角の遺構面とともに60.3mである。後2者は、旧地表をほぼ残していると考えられ、今回の発掘区遺構面とは0.3~0.4mの差がある。このほか発掘区東北隅付近に柱穴2、南端中央付近に柱根2、SB02内に土壙1を検出したが、それらは今回の発掘区内では建物にまとまらなかった。

遺物の大部分は赤褐色粘質土面の土壙から出土し、暗灰色粘質土面では遺構面の削平のためほとんど出土していない。瓦は南方の3個の土壙から特に多く出土している。軒瓦の大部分は、本薬師寺式複弁蓮華文軒丸瓦、同式偏行唐草文軒平瓦で、ほかに片岡王寺式複弁蓮華文軒丸瓦、本薬師寺式重弁蓮華文軒丸瓦、橘寺式複弁蓮華文軒丸瓦各1点があり、平安・鎌倉時代の巴文軒丸瓦、鎌倉時代の連珠文軒平瓦などが数点出土している。土器は土壙から出土したものが多い。南方の3個の土壙からは主に奈良末~平安初の土師器・須恵器、ほかに平安初期の綠釉花文線刻皿、平安中期の灰釉壺各1点出土した。

北寄りの2個の土壙からは瓦器が出土している。このほか、南方の西側の土壙から、奈良時代の綠釉陶の建物模型の勾欄部分の断片やガラス片が出土している。

2棟の東西棟建物の時期・性格については資料が乏しく確定できないが、一応つぎのように考えておきたい。時期は、建物の規模、柱掘形出土の奈良時代前期の須恵器などから、両者とも奈良時代と考える。性格については、2棟が東妻を揃えておりSB02がSB01を建て替えた建物と考えられること、食堂・十字廊（食殿）の後方に位置することから、ともに大炊屋などに關係する建物と考える。



第7図 薬師寺食堂北方遺構図

右京七条二坊の調査 調査地は薬師寺八幡宮北側で、平城京六条大路南側溝と右京七条二坊一坪内の土壌2を検出した。大路南側溝の幅は約4.0m、深さ約1.7mである。南岸には径10cmほどの丸太杭を30cm間隔に打ちこんだ護岸施設がみられた。溝の堆積土から奈良時代の須恵器、土師器、瓦が少量出土した。溝から薬師寺南面築地までの心々距離は約34.0mであり、六条大路の幅員を明らかにした。

大安寺僧房の調査 本調査は駐車場建設および家屋改築に伴う事前調査として、奈良市大安寺町1117番地において実施したものである。当該地は大安寺伽藍復原図によると、北面僧房の東端、すなわち三面僧房の東北隅近くにあたる。

調査の結果、後世の攪乱が著しく、発掘区北側で中房の一部を検出したが、南半部はすでに削平されていて大房は確認できず、わずかに鎌倉時代初頭とみられる井戸1基を検出したにとどまった。

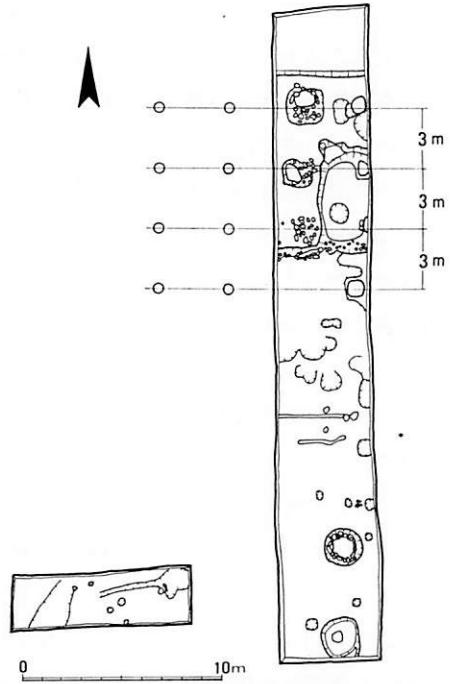
北面中房の梁間通りの礎石および根石列を2列検出した。1列の柱通りに4つの礎石がある梁間3間の総柱建物である。梁間の柱間寸法は10尺等間であり、『大安寺資財帳』の中房の記載寸法や1966年度調査の西面僧房中房の柱間寸法と一致する。桁行の柱間寸間については、礎石が動いているため正確な数値は求められないが12~13尺と推定された。残存する礎石は西列で2個、東列で4個の計6個であるが、いずれも原位置を移動している。西列では人頭大の根石をもった据付け痕跡が、削平された南の柱位置をのぞいて検出されたが、東列礎石には据付け痕跡が認められず、礎石は原位置から西へ動

いていると考えられる。礎石は東列南の逆截頭方錐形の凝灰岩製礎石のほかは、自然石を用いている。遺構面は梁間北側柱心から約1.6m北で一段低くなり基壇状となっている。

井戸は発掘区南半で検出した。柱を転用したとみられる円形の井筒を用い、その上方は軒瓦・丸平瓦・埠・凝灰岩切石を積み重ねて強化している。出土した瓦器により鎌倉時代初頭のものと考えられる。

瓦類は軒瓦・丸平瓦のほか鬼瓦・埠などがある。大半は奈良時代の大安寺式とよばれるものであるが、若干、大官大寺式や平安・鎌倉時代のものが混じる。土器は少なく、奈良時代中葉から鎌倉時代のものが混在する。土師器・須恵器のほか瓦器・施釉陶器が出土した。

また、この調査と併行して、東面僧房の外側



第8図 大安寺北僧房遺構図

にあたる地点についても発掘した。東面僧房の外側を区画しているとみられるところの南北溝（幅4m,深さ0.9m）と東西棟建物の一部を検出した。

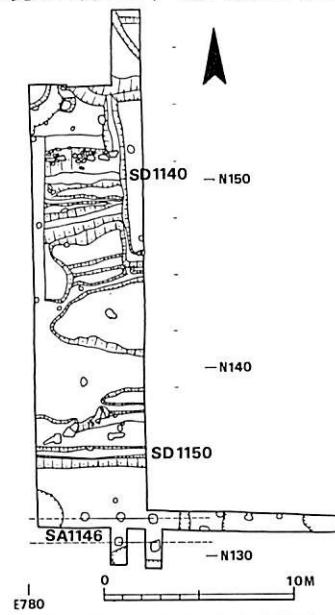
法華寺旧境内の調査 法華寺旧境内における発掘調査を5件実施した。いずれも家屋改築にともなう事前調査であり、発掘面積も限られている。しかも後世の攪乱が著しく、顕著な遺構はわずかであった。第95—4次調査は法華寺旧境内南半、中軸線に近く、位置的に南門が想定できる場所での調査で、建物1棟、東西溝1条を検出した。今回の調査で検出した建物は、発掘区の制約などから極めて一部しか調査できず、その性格を明らかにすることができなかった。

第95—8次調査は、既設水道管取り替えにともなう掘削の立会であるが、当該地は現法華寺南門前の道路であり、『大和名所図会』では南門両脇の築地塀に沿って巨大な礎石が数個配列されており、従来から金堂もしくは講堂がこの附近に当ると推定されてきた。掘削は以前の水道管敷設時の掘形を再度掘り直したため、攪乱されていない土層は切れぎれにしか断面に現われない結果となったが、東西に10尺間隔で並ぶ5間分の掘立柱痕跡を検出した。これを中軸線で折返すと7間の建物になると推定され、法華寺講堂もしくはその前身の建物遺構に当ると思われる。法華寺現本堂の地下でも当初の掘立柱建物を礎石建てに改作した事実があり、食堂跡と推定されている。南門付近の今後の調査が望まれる。

海竜王寺北方の調査 駐車場造成にともなう調査。調査地は海竜王寺現境内の北に接する水田で、金堂の北々東に位置する。検出した遺構は築地1条と溝2条である。

築地SA1146は発掘区南端を東西にはしるが、攪乱のため寄柱2間分しか確認できなかった。基底幅は6尺、柱間寸法は6尺等間である。溝SD1150は築地SA1146の北2.8mの位置を東西にはしる幅約1.6mの素掘りの溝である。南岸の遺存状況は良好だが、北岸は削平を受けている。溝の堆積土は2層にわかれ、下層を奈良時代、上層を平安時代初期に比定できる。溝SD1140は築地SA1146の北雨落溝SD1150の北15mの位置を東西にはしる幅1.9m、深さ1.2mの溝で、大きい自然石を側面に並べて護岸としている。護岸は北壁では良く残っていたが、南岸では発掘区西端に一部残っているにすぎない。底は素掘りのままで石敷等の化粧はない。瓦類、土器類、貨幣、木簡などが出土しており、奈良時代に比定できる。この築地SA1146、東西溝SD1150はともに、現在までに確認されている平城京条坊区画のいずれとも明確な関連性を示さないが、築地と東西溝のいずれかが海竜王寺旧寺域北限の一端を示すものであることは確実であろう。ただ、両者のいずれが寺域北限であるかについては決しがたく、今後の調査をまちたい。

(山本忠尚・岡本東三・綾村 宏・中村雅治)



第9図 海竜王寺北方遺構図

平城宮跡発見の殿堂雑形部材

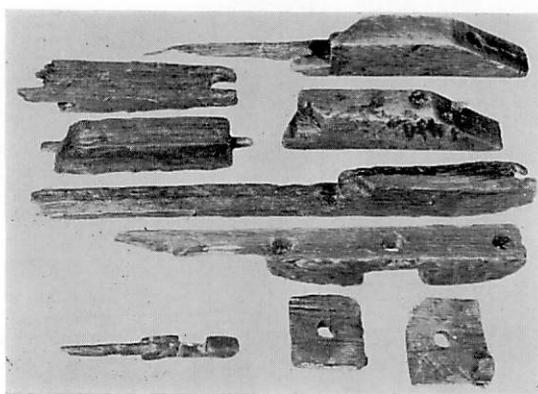
平城宮跡発掘調査部

推定第1次内裏の南面を画する築地回廊の東寄りにある樓風建物 S B7802は、1973年に発掘した。今回、この掘立柱抜取穴から出土した木製品を調査整理する過程で、建築模型の斗枠の部材が含まれていることを確認した。

部材 部材は何れも桧材で、側通り肘木1丁、通肘木1丁、尾垂木を受ける肘木2丁、卷斗1個、方斗1個、入側束1丁、同断片1丁、軒天井組子断片1丁、土居桁らしいもの1丁でその他にも同じ模型に属するらしい部材の木口部分等があった。

側通りの肘木は現存全長23.3cm、丈3cm、幅2.5cm、肘木長さ14.8cm、両端の太柄穴心々は12.6cm、相欠上木の仕口を持ち、一方の木口に長いつなぎが作り出されている。他方は折損したらしい。このつなぎの長さからみて、柱間寸法が23.3cmを越える側通りの肘木であることがわかる。通肘木は先端を二手先を受ける肘木に作り出し、相欠下木で、上端に隅行の肘木の仕口を持つので、側通りの通肘木である。側柱通り相欠心から太柄心迄12cm、丈3.1cm、幅2.3cm、現存全長30.5cmである。先端に卷斗の丸太柄があるが、中間に太柄穴がない。先端の斗で隅の柱通り尾垂木受け肘木を支える。尾垂木を受ける力肘木は2丁あり、2丁とも丈3.3cm幅2.5cmで先端を斜めに作り、ここに尾垂木を止める丸太柄を立てる。先端の勾配は2丁でやや異なり、1丁は約5.2/10、他は約6/10となる。側通りからの出は2丁とも大差ない。この2丁は使われた層が異なるかもしれない。

斗には大斗がないが、卷斗と方斗が1個づつある。何れも完形ではない。卷斗は長さ4.1cm、幅4.0cm、斗尻は現在斜めになる。斗尻の一端は残り、斗縁の丈が1.4cmあり、かなり高い。全体の丈は不明であるが、長さの3/4位と見ると3.2cm程となる。方斗は上端に丸桁の組手を受けたらしい含みの底が残り、三手先の隅の方斗に当る。卷斗より大きく作られ、長さ4.9cm、幅4.5cmある。隅二重尾垂木の上にのると考えられ、斗縁はほとんど残っていない。

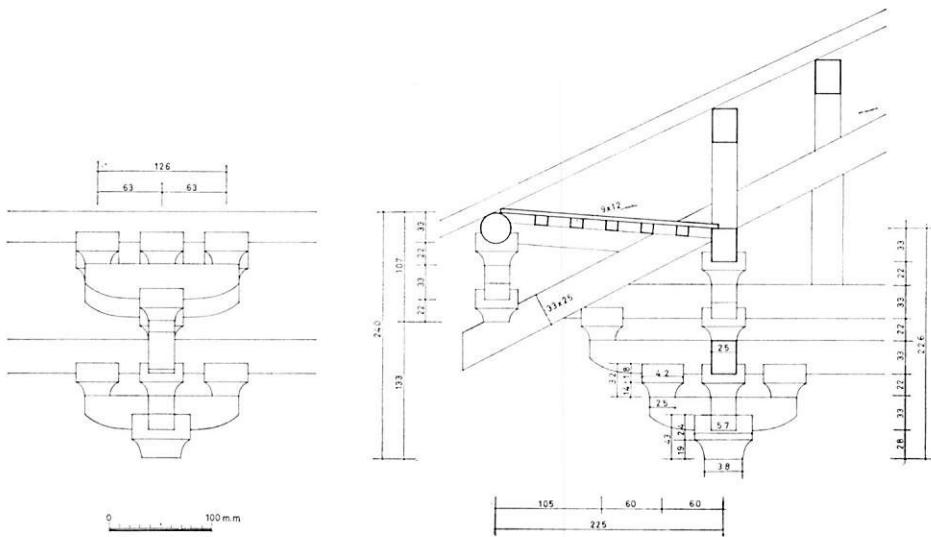


第1図 雜形部材

入側束は上端を斜に作り、上下に丸柄があり、内部で力肘木の上に立って直接尾垂木下端を受けていた。他にこれと同種材の断片が1丁ある。

軒天井組子は全長9.8cm、丈0.7cm、幅1.2cmあり、組子相欠きが2個所残存し、1支寸法は3.5cmある。幅はもとのままであるが、丈の方ははぎとられた痕があり、もう少し大きかったことがわかる。

土居桁は現存幅3.6cm、丈1.7cm、両端



第2図 三手先斗栱の復原

は折損するが、心々12cmの丸太柄穴がある。柱盤や台輪としては部材が細いので、内部の束受けと考えられる。

復原 これらの部材からもとの構成を第2図のように復原した。大斗の大きさが不明でありまた三手先の出も明らかでないが、軒天井の納まり、並びに薬師寺東塔・海竜王寺五重小塔の出を勘案して推定した。二手先にのびる肘木の中間に卷斗の太柄がなく、尾垂木を受ける力肘木には二手先の肘木と組合う仕口がない。従って軒支輪がなく、軒天井だけであったと考えられ、薬師寺東塔に近い古式の三手先斗栱であり、現存例として薬師寺に続く海竜王寺五重小塔よりも古式のものと考えられる。

海竜王寺五重小塔と同じく奈良時代の製作になる元興寺極楽坊五重小塔は、肘木長さ14.2cm、卷斗太柄心々11.8cm、丈3cm、幅2.4cmで発見部材とほぼ一致する。海竜王寺五重小塔の初重肘木は長さ13.2cm、丈2.5cm、幅2.3cmでやや小さいが、卷斗幅は4.2cmあってほぼ等しい。

この発見部材がどのような建造物の模型であったか明らかでないが、実物の1/10を意識して作られている。三手先斗栱は斗栱のうちでも、古代にあっては最も複雑な構成であり、寺院であれば金堂・塔・二重門等の重要な堂塔にのみ用いられる。

現存する奈良時代の小建築が、前記の海竜王寺五重小塔・元興寺極楽坊五重小塔・正倉院の紫檀塔残欠等何れも塔に限定されていることを考えると、この部材も塔に用いた可能性も少くない。

部材を発見した樓風建物S B7802は、神龜頃の建立と推定され、柱抜取穴の埋土からは天平勝宝5年(753)の年紀をもつ木簡が出土しており、この模型の廃棄された時期もほぼこの頃とみてよからう。部材の数は少ないが、平城宮跡からこのような部材が発見されたのは初めてのことであり、しかも古式の三手先斗栱であることはきわめて興味のあることといえよう。

(細見啓三・岡田英男)

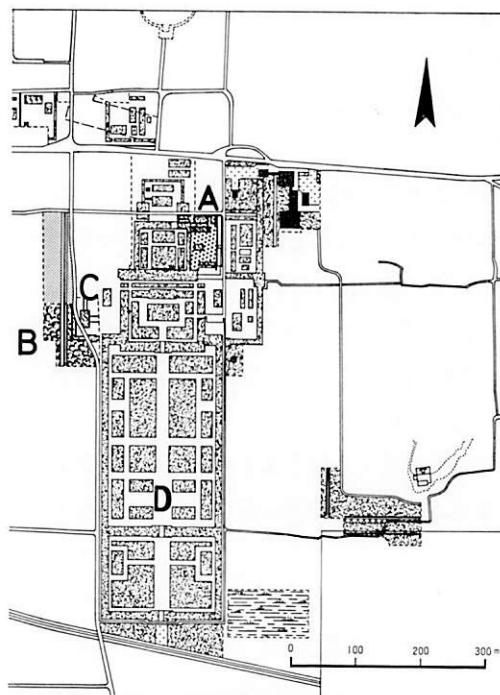
平城宮跡の整備(6)

平城宮跡発掘調査部

1975年度の宮跡整備は、第2次内裏内郭および内郭築地回廊基壇復原整備、第2次内裏外郭整備、緑陰帯造成、灌水施設、案内板、照明灯の設置を行った。

第2次内裏内郭築地回廊基壇復原整備 1974年度に東棊をふくむ築地回廊東南隅部を復原整備したが、今年度はこれに接続する東面回廊を延長し、北へ78.5m分施工した。発掘次数でいえば第3・70・73次にあたり、門2ヶ所(SB7951, SB6900)を含む桁行20間分である。この部分では築地心より2.5m以東は、南北に通る市道と大正時代に整備した側溝のために遺構が確認できず今回も施工していない。

復原にあたっては遺構を保護することを第一義とし、かつ往時の姿を再現しようとするところから、1 遺構面より一定寸法のレベルアップをする。2 遺構での多少の施工むらは除き、基準方位・基準寸法を設定するという方針をとった。1に関しては、既施工の東南隅部で採用した70cm高が、次年度予定している東面中央部での井戸跡現寸遺構模形据付けのためにも支障がないことを確認したのでこの数値をとった。一方勾配はこの2点を直線で結ぶ南から北へ昇る1.25/1000の勾配とした。2に関しては次年度以降の施工のこともあり、現在までにはほぼ完掘



第1図 平城宮跡整備図

している東面築地回廊全長にわたっての検討が必要であった。遺構上で方位がひろえるのは次の4条であり、それぞれ平城宮実測方位より北で西に振れる傾向がある。

イ、築地東寄柱心—東面全長で5個の礎石が残存しており、それを結ぶ線は4.35/1000西偏。

ロ、築地西寄柱心—62m隔たった2個の礎石で3.10/1000西偏。

ハ、西側柱心—井戸位置での2個の礎石では3.54/1000西偏。

ニ、西雨落溝—比較的の残存状況の良い6地点で4.19/1000西偏。

この4つの数値のうち、ハが発見した礎石およびその周辺遺構の残存状況が他に比し良好であること、4条の平均的な数値であること、北面築地回廊との関係とも矛盾しないことなどから最も妥当なものと考

え、今回はこれを採用した。

この結果、北面築地回廊との角度は $90^{\circ}12'10''$ の鈍角となった。現在までの発掘で南面は北面と平行であることが認められるから、築地回廊一郭は正方形とはならず、平行四辺形、あるいは台形であることが考えられる。また、この角度が東面築地回廊全長（南北築地回廊心々）185.96mに対し実長として66cmとなりその数値が比較的僅少であるところから、当時の施工誤差とも考えられる。平城京の条坊方眼も東西方位に対し、南北方位の振れが大きいとみられるから、これとの関連においてさらに検討を加える必要があろう。いずれにしても西面築地回廊が未発掘である現時点ではいざれともきめがたい。

ちなみに平城宮跡の発掘調査で使用している方位は、この北面築地回廊の北雨落溝の東西線を基準にしたもので、国土方眼よりも $0^{\circ}07'47''$ 西で南偏する。

柱間寸法については、東面での3個所の門も他の間と同一寸法であるから、全長を総柱間数48で除すと1間が3.874mとなり、13尺（1尺は29.8cm）の整数を得る。梁間寸法も桁行と同様に13尺である。

なお、今年度施工区では築地回廊のほかに、掘立柱建物5棟および内裏掘立柱回廊東北部などの盛土、張芝による遺構表示を行った（第1図A）。

緑陰帯造成 1974年度から始めた緑陰帯造成を、今年度は南へ約105m（5100m²）延長した。遺構表示として、前年同様第2次内裏外郭築地の西側を流れる南北大溝（SD3715）を和泉砂岩割石で護岸し表示した。植栽については、西側からの大極殿や東山等の眺望をさまたげないよう1本/250m²程度の密度におさえた疎林とした（第1図B）。

内裏外郭整備 第91次発掘調査により確認された第2次内裏外郭築地西南隅の門と築地塀、および礎石建物1棟を含む約3000m²について整備した。これら建物遺構は、宮跡中央を南北に走る市道によって分断されているため、一部表示出来なかった。門および築地塀は平均70cm、礎石建物は平均40cm盛土してその規模を表示し、表面は張芝とした（第1図C）。

その他 第2次朝堂院・朝集殿地区に灌水施設として自動散水装置（スプリンクラー80基、散水栓2基、第1図D）、照明設備（水銀灯4基）案内板（遺構名称板8基）を設置した。

（渡辺康史・細見啓三）



第2図 第2次内裏西郭の整備

平城宮跡第3収蔵庫の建設

平城宮跡発掘調査部

1968・1969年度に資料館と第1・第2収蔵庫を建設して再出発した調査部における施設整備の第2段階として、このたび北接位置に第3収蔵庫を増設した。

これは増加する一方の出土遺物の収蔵のほか、仮設プレハブで行っていた遺物の清掃整理や保存科学的処理の作業環境を改善すると同時に、長い間の懸案であった発掘作業員の着替所を設けることを目的としている。いわば、調査部の発掘作業と出土遺物の処理に密着した部門を統合したものである。

建物は宮跡内であることから、遺構に影響をあたえないこと、環境を著しく損わない意匠であること、将来撤去可能であることなど、資料館建設当初の基本計画にもとづき設計された。

東西棟の1階は収蔵庫と警備室にあてる（一部を間仕切って仮に埋蔵文化財センターの事務及び研究室として使用）。収蔵庫は保存処理をほどこした木器の収納棚、処理前の木器をいれる水槽、真空凍結乾燥処理をほどこした木簡などをいれる空気調整装置をつけた特別保存庫からなる。2階は遺物整理関係の作業室であり、各室に水洗場をそなえる。木器、金属整理室には金属の整形過程に生じる粉塵を吸収するための装置をつけた。瓦整理室には、土ぼこりを吸収するダクトをつけた作業台を設置した。なお、階下からの遺物の運搬にはリフトを使用する。

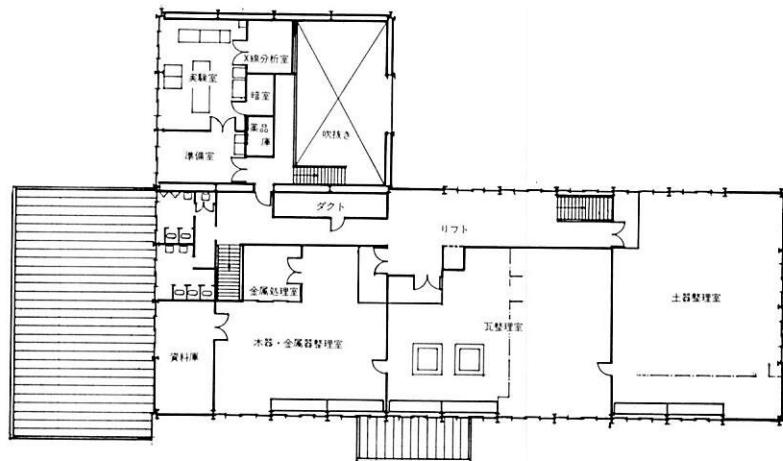
北面の張出部は、保存科学部門を収容する。1階のP.E.G.含浸処理室は、木製品に対してポリエチレン・グリコールを含浸する。大型の柱材にも対応しうるよう全長6mの含浸タンク2機をそなえる。大型遺物の移動を円滑にするためホイストをもうける。室内が高温多湿になることを配慮して天井に大型排気装置をつけた。樹脂含浸室は、金属遺物にアクリルエマルジョン等の合成樹脂を含浸するための部屋である。真空含浸装置を中心とする器材をおき、有機溶剤による公害対策として、室外に活性炭による濾過装置をおく。凍結乾燥機室では、凍結乾燥によって木簡などの木器を保存する。乾燥機のほかT.B.A.による前処理装置や簡易防爆装置をそなえる。戸外には柱根などの大型木器を一時的に保管する水槽を設けている。

2階の実験室では、木簡削片の保存処理、ならびに保存処理に関する基礎実験、材質分析等を行う。このため、木簡削片プレパラート製作機、実験台、ドラフト、恒温恒湿機、X線回析、螢光X線分析装置等をおく。X線分析室では、錆などで隠れた形や文様をレントゲンで透視し修理などの処理にそなえる。装置は100KVと160KVの2種あり、使用目的に応じて使いわかる。このほか2階には準備室・暗室・薬品庫などを設けている。

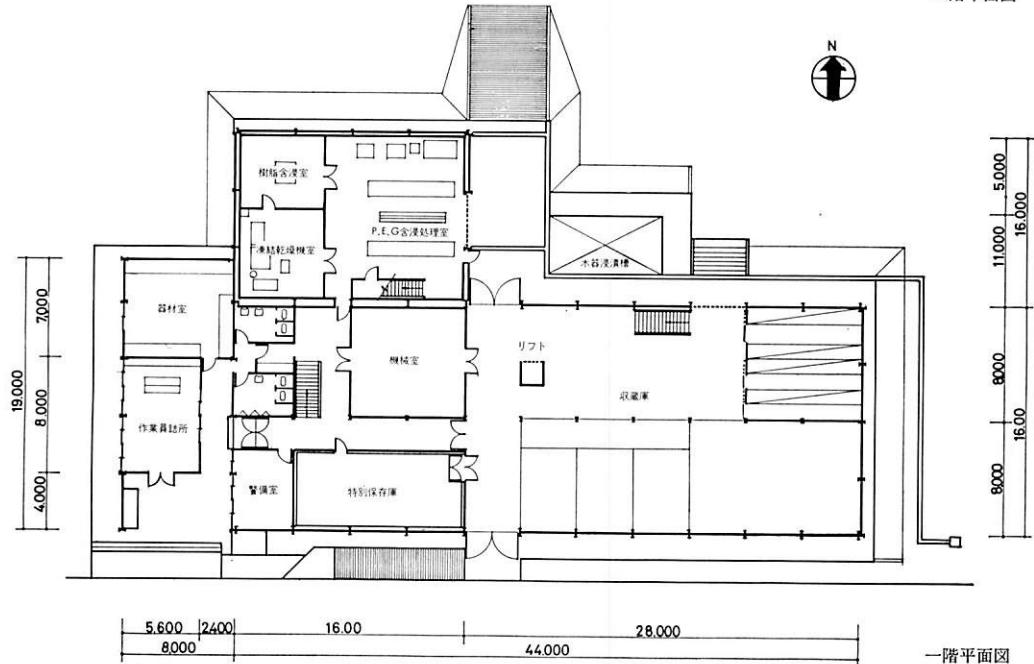
基本設計は入江・三宅設計事務所が行い、実施設計および工事監理は建設省近畿地方建設局があたった。施工は株式会社森組である。なお、次年度以降、同規模の施設をこの北側に増設し、全体を東向きのヨ字形にまとめて、資料館を中心とする発掘調査用施設整備は一応完了することになる。

（細見啓三・町田 章）

平城宮跡発掘調査部



二階平面図



第3収蔵庫平面図

建築概要 建築面積 1,061.9 m²

延面積 1階: 1,061.9 m², 2階: 826.3 m², 合計: 1,888.2 m²

構造および仕上げ 主体部, 鉄骨造。屋根, コルテン鋼山型プレート葺。外壁, A・L・C版, 一部C・B積み, 色モルタル吹付け。内部床モルタルコテ押さえ, 一部フローリング張り。内壁, A・L・C版, C・Bあらわし, 西北保存科学一郭のみA・L・C版張り間仕切り壁, C・Bまたはアスペストラックス。天井, 軽量鉄骨下地フレキシブルボードまたはプラスチックボード打上げ。屋根鋼板下, 断熱材吹付け。